

なく、北浦でも帆曳が始まったんですが、余り増え  
も魚をとり過ぎて資源をたやしては困るといふんで、  
昭和初期に霞ヶ浦調整規則というものが作られて、帆  
曳網の許可件数は、西浦、北浦併せて五〇〇艘と決め  
られました。この数は昭和四十二年に帆曳が廃止され  
るまで変わりませんでした。

私の家は、折本良平が漁業に転業してから私の代ま  
で四代に亘って帆曳をして来たんです。私は本家では  
なく分家で、兄が本家を継いだんですが、大東亜戦争  
で死んでしまいました。私は十五才の頃から船に乗っ  
ていました。

「ひとの女房とわかさぎは、月夜でとれない闇の晩」  
霞ヶ浦小唄にはこんな唄があるんですが。

帆曳船は夕方から夜にかけて操業するんです。明る  
い時はとれないし、月夜でもとれないんで、それでこ  
んな唄が出来たんですね。明るいと、網が魚に見えて  
逃げてしまわらんです。昔は往復は動力でなく手漕  
ぎだったんです。櫓で漕いだわけです。裸になつてね。  
大汗をかいて、弁当をおはちち盛っていつて、腹が減  
ったらめしを食いながら、櫓を漕いだわけです。

夜帆を曳くためには、午後二時三時頃浜を出るんで  
す。そして日没まで、一心に漕ぐんですね。そして二

里ばかり沖に出て、日が落ちる頃、よしここから操業  
しようということになると、網をおろし、帆柱を立て  
帆を上げるんです。そうすると風が帆にはらんで船が  
横に歩き始める。船が歩けば綱が引かれ、綱の先の水  
に入っている網も引かれて魚がとれるというわけです。

風が強ければ強いほど綱の走り方も早いので、魚も  
それだけ余計にとれる。だから漁師達は大きな風がで  
てくると勇んで沖に漕ぎ出したもんですよ。今は動力  
だから体力には関係ありませんが、昔は手漕ぎだから  
力のある人の方が魚をたくさんとりました。というの  
は沖へ出るまでに、力のある人となない人の差は相当に  
出るんです。例えばある人が、二里も沖へ出て帆を上  
げたのに、他の人は日が落ちかけても、一里しか出ら  
れない、ということもあるわけです。そうすると、一  
里の人と二里の人とは、綱を引ける距離が異うから魚  
のとれ具合も半分というわけです。

昭和の初めまでは船は一人しか乗れなかったから大  
変なもんでした。それが昭和になつて船も大きくなり  
嫁さんなんかと一緒に操業するようになったんです。

私の子供の頃は勿論一人しか乗れませんでした。一人  
しか乗れないということは、船が小さくて安定性がな  
いという事ですね。だから、おっかないですよ。風が